

郷土室だより

東京を語る会第50回記念講演

ぼくの見た東京

吉本 隆 明

今御紹介いただいた吉本です。

今日は「ぼくの見た東京」というテーマを与えられました。ただ懐しい東京、子供のとき住んでいた昔の町の思い出を懐古するということにもならず、また現在の巨大な都市東京を解剖するだけということにもならず、子供のときの体験や見聞とかかわりをもたせながら、いまの東京をぼくがどう見るかお話できたらと思います。

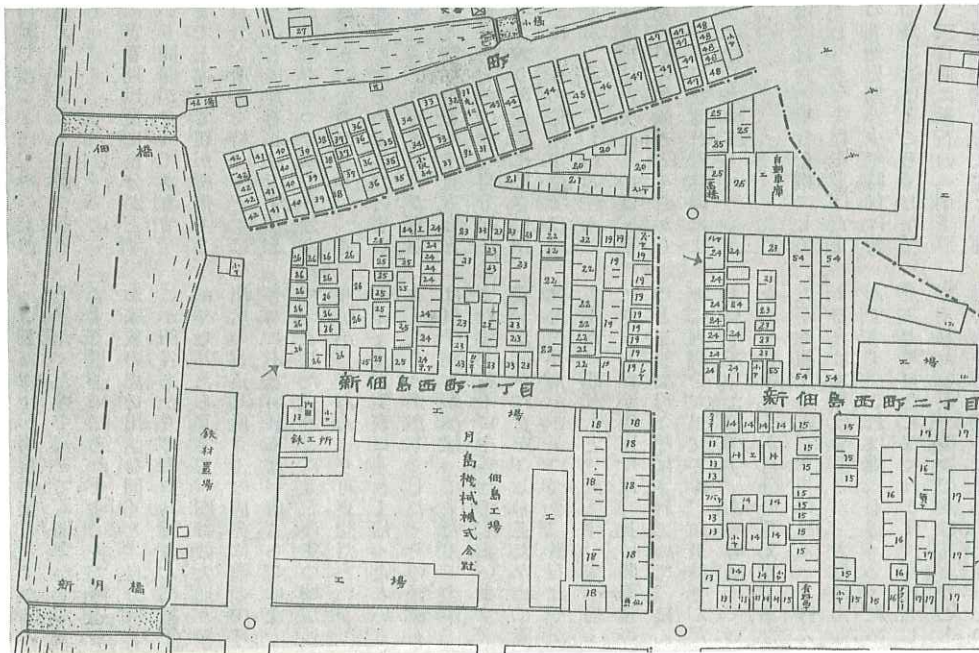
ぼくは、川向の月島で生まれましたが、その生れた場所をいま指定できません。記憶があるようになった時にはすでに、新佃島西町一丁目いまの佃二丁目に移っていました。そこはちょうど前を堀割が流れていて、家からみると堀割の向こう側に、ぼくが行った佃島小学校がありました。学校の屋上にいる生徒が家からはちゃんと見えた覚えがあります。その当時の略地図でいいますと、この角の家です。前に鉄材置場があって、ここに新月橋という橋がかかってました。堀割を右へたると隅田川の本流に出ます。三歳か四歳くらいから記憶がずっとあり、十四、五歳くらいまでここにて、それから少し離れた、新佃島二丁目二十四番地の角から一、二、三軒目に移りました。隣が荒物屋でした、この時には

十四、五歳にな
っていて、深川
にある府立化学
工業学校に通っ
ていました。こ
の界限の記憶は
はじめの一丁目
二十六番地の家
で小学校がすぐ
見えた時代が一
番ぼくにあって
印象的です。

ところどころで
りの人が、自分
の住んでいる町
や都市をどう見
るのか、その見
方を決定してい
るのは何だろう
か、すこし考え
てみます。ぼく
は二つあるよう
に思います。一
つはその人が赤
ん坊の時あるい
は少年少女期に
は少年少女期に
親たちと一緒に
住んで学校へ通
ったり遊んだり
した界限の印象

昭和八年の新佃島西町辺

(『京橋区火保図』沼尻長治編より)



みたいなのが、その人の町や都市をみる見方を決めていくだろうということです。もう一つあると思います。それは年齢でいえば十四、五歳から二十歳くらいまでの間、つまりその人の青春期に入りかかる時から青春時代にかけての時期に、どこに住んで、どんなことをしていたかということが、やっぱりその人の都市や町の見方を決めていくだろうということです。ぼくの場合でいえば、子供の時住んでいた界限、遊んだり勉強したりした月島・佃島の界限がひとつあります。それから、十四、五歳になって、当時の工業学校に通い始めて、どんな風に親の元に行ったか、そして親の元を離れようと思ったということが、もうひとつあるわけです。その挙句に、ぼくの場合は、工業学校を了えて山形県の米沢市の工業専門学校へ行きまして親の元を離れてしまいました。それからまた、ちょうど工專の終わり頃、太平洋戦争のはげしい時期にかかりました。戦争中の学徒動員みたいなもので、東京、それから富山県の魚津の工場動員で働いていました。それから農村動員もあって、埼玉県大里郡というところで農家において、麦刈とか田植とかをやったことがあります。

つまり青春期に入りかけてから青春

期にかけて、だいたいその人は親の元を離れたいか、あるいは自分の行動半径を拡げたいとか、自分一人で行くか新しい場所へ行って何かを体験したいとか考えるわけです。地方の人でしたら、郷里を離れて東京へやって来て東京で学校へ行ったり、あるいは働いたりしようとか決心して郷里を離れるということがあります。青春期に入りかけてから青春時代というのは、じぶんの幼児期から少年期に住んでいた場所から離れて、いくつかの場々を点々と移っていくという経験をたいていのが大なり小なりすると思います。ずっと東京だったという人ももちろんいるわけですが、願望としては親のところを離れて独立してみたいということがあって、いくつか場所を移していきます。そういう経験はその人の自分の住んでいた都市や町、あるいは郷里をみる見方を、とても大きく決定いたしました。郷里を離れたとか少年のときまで住んでいた町を離れて外からその町を見渡した体験がありますと、その人が都市や町をどうみるかの見方をおおきく左右する気がいたします。幼児期から少年期に体験した町の内側にいるもの見方と、青春前期から青春期にかけて体験した、町を出て自分の町を外

町の生活を体験したことは、その人の都市をみる見方をおおしく特徴づけると言えます。そのあとに青春期以後に自分がどこに住むかという問題がやってきます。今度はそれまでと違って親が所帯主じゃなくて、自分が所帯を持つてどこに住むかということになるわけです。それぞれの方が所帯をもつ立場で自分の住みたい地域はどこなのだろうか、考えることがあるのはそのときだと思います。その場合、それぞれの人が青春期までに形成した都市をみる見方ととても深い関連があるのです。自分が住みたい願望のとおり地域に実さい住めるかどうかは、今の住宅事情ではおのずから別なんです、しかし住みたいという願望の地域が決まるのは、その人の幼児期の町の体験と、それから青春期にかかって町を離れた体験によつてであろうと存じます。

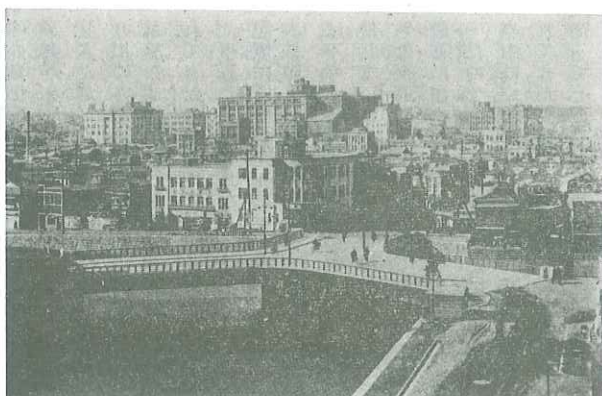
具体的にはよく自身の場合を例にして申し上げてみましょう。先程申し上げたように、ぼくの乳幼児期と少年時代は新佃島で、元佃島に近いところでした。ところで二、三日前に漱石の『硝子戸の中』という随筆を読んですと、乳幼児期のことが書いてありました。その中で漱石は牛込のあたりの名主の末っ子なんですが両親の年とってからの子供だったので、とても恥ずかしくてすぐ里子にやられます。後で姉達とか家族の思い出話を聞くと、自分はどこか四谷あたりの古道具屋さんに里子にやられたらしくて、四谷の大通りの出店の古道具屋さんの店先に籠の中にちよこんといわれ、店ざらしになっていました。そこに漱石の妻の姉が通りかかってあんまり可哀想だといってそのまま実家に連れて帰ったというようなことがありました。その後漱石は里子から家へ帰って来たんですが、またすぐ養子にやられてしまいました。養父がほかに女をこしらえたために養父母の仲たがいがつづき、漱石はやがて実家に連れもどされます。家へ帰ってきましてが実家では、長い間両親のことを祖父と呼びされていて、ほんとに両親をお祖父さん、お祖母さんだと思っていたのです。ある時眠っていたら、女中さんが自分の耳元で、あなたがお祖父さん、お祖母さんって呼んでる人は本当はお父さん、お母さんなんです、これは誰にも言っちゃだめだよと耳打ちしてくれます。耳打ちしてくれたのが、夢なのかほんとのことだったのか記憶が曖昧だったし、その時耳打ちしてくれた女中さんの名前も全然覚えてないが、耳打ちしてくれた

こと自体はとも有難いと感じた、本当のことを言ってくれたからと言うよりも、親切だったというので感謝したい気持ちだった。漱石は乳幼児期の不幸な体験とその住み変った場所のことをそう書いています。

漱石になぞらえてほくも新仙島の乳幼児期に育った家の中で、不幸じゃなくてわりに幸福な思い出なんです。印象に深い記憶をひとつ申してみたい気になりました。弟が生れた時なんです、その頃のお産は家の中で、産婆さんがやって来てやりました。子供心に何となく異様な雰囲気を感じたのですが、決して悪くない異様さでした。普段は真面目でむっつりした親父なんです、何となくそわそわして、夜店へ行こうとほくを誘って月島の西仲通りの商店街の道の真中に毎晩出ている夜店街に出かけました。親父が高ぶっている感じみたいのが子供心にもよく伝わりました。屋台のたい焼屋さんでたい焼を買って、たい焼の包みを親父は着物の懐ろに入れて、ほくにひとつ分けて寄こして、それを食べながら、ふらふらふらふら通りを歩いて時間をつぶしました。手を引いてもらって歩きまわって、しばらくしてから家へ帰って行ったという記憶が鮮明にあります。ほく自身だけの記憶としては、

昭和四年頃の三吉橋付近

後方のビル街は銀座



姉とか兄とかが川向うの仙島小学校へ行っちゃってる留守に、いつも上櫃の所でうつつらうつつら居眠りしていました。時々目をさまして、川向うに鳩なんか飛んでいるのをほんやり眺めていました。それから夕方になって眼を凝らすと、略図の右側の方向に、大川（隈田川）を隔てて聖路加病院の先塔に十字架が照明でもって光って見えたのが記憶にあります。よく考えてみますと、その種の記憶はほくにあって

黄金時代っていいでしょうか、生涯の中でも、とてもいい記憶になっています。つまり不幸でない思い出として残っています。親父は、略図の少し左手の東河岸通りで小さなボートとか、釣船とかを造る造船所を持っていました。そこへよく遊びに行って、やはり一日中ぼんやりして、木を悪戯したり、模型の舟をつくったりして遊んでいたことを記憶しています。

それから幼少年期の自分の遊び場所の範囲を申しますと、今の晴海、子供の頃の四号地の原っぱでよく遊びました。雑草がいっぱいはえているのですが、一日中遊んでたみたいなのが黄金時代の記憶としてあります。そうしますと、こういう状態で自分の記憶の中に残っているのは何でしょうか。それは親の家を中心としてその界限を濃厚な記憶の塗料で塗りこめていて、その記憶の核心になる強烈な印象で雰囲気を作っていることのように思えます。その雰囲気が多分、乳幼児期にその人間が町について記憶している印象の連鎖みたいなもので、乳幼児期体験のおおきな要素になるだろうと思われのです。親の住み家を中心として、一種の濃厚な記憶の雰囲気

を作っていて、その中で重点となる思い出がいくつもあります。不幸な思い出であったり、幸福な思い出であったりしながら、それが雰囲気を作っている核になっているのです。時々、その雰囲気の外に出ることもあるわけですが、普段はその内側に住んでいるのです。

自分のことでいいますと、その雰囲気の内外の境界点のひとつは、いまお話をしているこの場所です。窓の外に三吉橋のそばに自分の造船所で造ったボートで、貸ボート屋さんの店を開いていました。そこへはよく一人で、佃の渡し船で渡って歩いてやってきました。しかし、それは遠出に属していて、自分の濃厚な乳幼児期から少年期に作られた雰囲気からは最後の境界点でした。別の方向へ行きますと、相生橋という橋が深川越中島との間にあります。それを越えて行きますと、門前仲町がありますが、そこはやはり乳幼児期から少年期の雰囲気の一番外側だったと思います。つまりそれ以上外へ行きますと、雰囲気がなくなっちゃうという、一番外郭にあたったところなんです。そこは小学校上級の時通っていた塾がありました。そこでの友達は深川地区の友達が多くて、自分なりに強い印象を持った場所だったので、

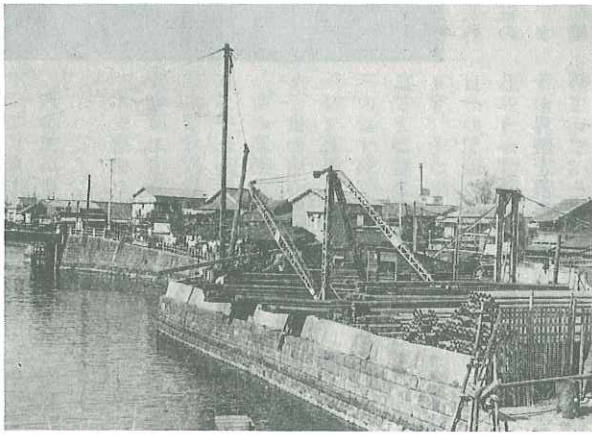
多分ひとつの境界線で外へいっちゃえば、乳幼児期から少年期にかけての自分の体験に深く入ってくる場所ではなくなってしまう境目だったのです。もつと別の方角の境界点はいま晴海町、昔の四号埋立地です。それが、霧閉気の境界点の一番はずれだったと思います。ぼくの場合いま申上げました三つの境界点を結びますと、その外側ではなくなってしまう、中心にくる程濃厚であるような霧閉気の地域が出来あがりますが、それが乳幼児から少年期にかけての無意識となつて残っている町の体験だと思っています。

不幸な体験の記憶も言わないと均斉がとれませんが、お祖母さんとお祖父さんお祖母さんがまだ生きていました。今かんがえるとあんまり不幸だとは思っていないのですが、その頃、お祖父さんお祖母さんがまだ生きていました。お祖母さんは寝込んでこの記憶の方が多いのですが、お祖父さんは、奄疎して朦朧となっていました。ぼくの家は築地の本願寺に属する浄土真宗西本願寺派ということで、祖父母はよくお詣りに来るわけです。お詣りに来るのはいいんですが、帰りは路がもうわかなくなっちゃって交番かなんかに保護されてるわけです。交番から交番へ連絡が伝わって近所の交番のお巡りさんがやってきて、お前んこのお祖

父さんはどこそこを保護されているぞっていうことで、親からお前行ってこいと言われて、それでよく引き取りに行つて、連れてこさせられたつてのを覚えていません。そんなに不幸だった記憶でもないんですが子供頃は子供心に、何となく不気味だなあつて感じがしました。お祖父さんが変な人のような感じがして怖かったのを覚えていません。おなじ記憶では、相生橋の真中の島公園といつて小さな公園があります。そこでよくお祖父さんがベンチに座つてぼんやり川の方を眺めているつていうことで、おなじように行つて連れてきたのを覚えていません。

生れたのは月島なんですが、記憶にはない一、二年を過しています。多分その場所での体験は不幸だったんじゃないかと推量してあります。郷里から親父たちは夜逃同然で東京へ出てきて最初に住みついた場所がそこだったので、ぼくはちょうど母親のお腹の中にいる時に、そうやって郷里を逃れてきた両親が、そこに居るつて少したつてそこで生れたんだと思います。両親は多分職もなく何もなさな苦勞したにちがいません。だから

昭和三十年頃の佃島西町



その時は貧困と不安にまつわる不幸な体験をしたのだと存じます。その時の不幸の内容は無意識に入つていて自分ではよく判らないながら、重要に自分を決定しているように思っています。

で、経済的にきつというところから派生して夫婦の中もよくなく、母や祖父母はしきりに郷里に帰りがつていたか、いろんなことがきつと重なつていたと思います。そういう乳幼児期だったので、深層の無意識に深く影響しているでしょう。やっぱりよく自分で分析してみないといけないと思つています。ある程度は再現できるような気がしています。

乳幼児期から少年期にかけての住居と場所、その時の体験はその人の、都市や町をみる場合の見方を決定していると思つてます。意識的に決定してるとは限らないのですが、無意識のうちに決定するといえます。ぼく自身、自分の東京をみる見方を第一次的に決定しているのは、その時の体験で記憶で覚えることも、覚えてなくて無意識の深いところに入つて、東京にたいする見方を決定している部分もあります。多分皆さんの東京にたいする見方、あるいは皆さんの郷里にたいする見方もおなじではないかと存じます。その時期の体験が不幸だったか、幸福だったか、あるいはどんなふうにか深刻だったか、あるいはほんのふり深かったか、あるいはほんのふり浅かったか、あるいは、自分の郷里の都市や町の見方をおおしく決めています。

もう一つの時期は青春前期から青春
期にかけての時期の体験です。ぼくのば
あいは東京を離れた体験でした。この
種の体験はいずれにしろ時代の要請の
ばあいもありますし、両親の家を離れ
てみたいとか、両親に何となく反抗し
てみたいとか、両親の言いなりになり
たくないとかいうような動機が働く時
期です。両親の家を中心にして幼少年
期から形成された一つの雰囲気を出し
てみたい願望もありますし、また青
春期になりますと親の丈夫な間は、定
住者であるよりも一種の遊牧民と同じ
で家を離れて転々と、どっかへ行って
住んでみたいとか、どっかへ旅行して
みたいと思うわけです。その時
期は言ってみれば、今まで農民の家の
ように定住者として住んで都市や町の
雰囲気を作っていたんですが、その外
部へ出て行って、遊牧民のようにいろ
んな町や都市を体験したいとか考える
ようになってきます。その時期に、外
から自分の町や都市をみる見方を獲得
してゆくのです。ぼくなどの同年代の
人ではもっとおおきな体験で、戦争の
ために兵士となって大陸へ行ったとか
南太平洋の島々へ行ったとか、あるいは
東南アジアのビルマとかタイとかカ
ンボジアへ行ったとかいう外国体験の
ばあいもおおきくあります。そういう

さまざまな外部の体験から郷里を見る
とか、もっと広く言えば日本という国
を見るときか、もっと狭く言えば自分
の住んだ町や都市をみるとか、そういう
見方を必ず獲取したと思います。とく
にぼくらの年代は北の方は大陸の北方
から大陸の南方、南中国とか東南アジ
アとかインド国境に近いところから、
インドネシアとかニューギニアとかの
島々までを含めて、ものすごく広範囲
に外から日本の国を見たとか、自分の
郷里の都市や町を見たとかいう体験を
しているはずで、その体験は自分の住
んでいる都市をどう見るかの見方を
おおきく決定していると思います。
この外部から見るといふ体験は後に
なりますと、もっと違う見方に転化さ
れます。それは上から鳥のような視線
で町や都市をみる見方です。意味論的
に言えば相対的に自分の町や都市を客
体化してつかまえる見方だともいま
す。多分それは、青春前期から青春期
にかけて外から内を見たという経験を
ふまえて出てきたのだと思います。
いままで申し上げました二つの時期
の体験を経まして、いよいよ自分が自
分の住家を決める決定者となります。
それは壮年期とそれ以降に訪れるわけ
です。結婚して子供を持ち、世帯を張
る時期になって自分はどこに住もうか

自分の住んでいる都市や街をどう考え
るかの見方を初めて自分で行使するわ
けです。自分の願望通りいくかどうか
は、住宅事情や経済状態によりますか
ら別のこととして、自分は、こんな都
市や町のこういう場所に住みたいんだ
という願望が形成される根拠はもう確
立されていますから、できるだけそれ
を実現したいと考えるでしょう。
ぼくも、経済的事情その他で、転々
として住居の場所を移動しましたが、
新佃島から両親が移った葛飾の家へ行
く中継点にあたる日暮里のあたりに、
最初の住居を定めました。日暮里の降
りた所の街筋がものすごく気に入って
自分は住むならここだ、と思ったので
す。それ以後、今に至るまで、日暮里、
田端、それから御徒町それから山手線
の内側で言えば、駒込林町(今の千駄
木)、団子坂、本駒込の駒込吉祥寺のそ
ばなどを転々としています。ぼくの住
家を決定したのは、日暮里とか御徒町
とか田端とか、そういう界限を中心と
したごく限られた所です。それは勿論、
経済的に家が安いとかいうことがある
わけですが、家が相当高かったけれど
も、かなり無理したなあっていう意味
も含めて、その界限に固執してきたと
ころがあります。この固守の仕方は、
本当は、無意識の好感で選んでいたの

で、決して意識的ではないのです。
後年になって自分はなぜこんなとこ
ろを住家として選んでるのか、よくよ
く考えてみたことがあります。その時
思い至ったことは、ひとつは乳幼児期
から少年期にかけて住んだ、濃厚に残
っている町の雰囲気イメージがあり
まして、その雰囲気とともによく似た
場所を無意識のうちに選んでいるって
ことがあります。日暮里の界限とか、
田端とかそういう界限は、下町ってい
うものの濃密さ、まだ共同体意識みた
いなものが残っていないことはないみた
いな、そういう濃厚な身内意識がある
所です。それを選んでいることは確か
なんです。でももうひとつの要因があ
ります。
ぼくは青春前期から青春期にかけ
て、学校を求めて東京を離れて、山形
県へ行ったり、学徒動員で富山県魚津
へ行ってみたり、農村動員で埼玉県へ
行って住んでみたりという体験をしま
した。そういう時期の体験も自分の中
に入ってしまった、あんまり濃厚な雰囲
気みたいなものが苦しくなってしまう
と、その場所から勝手に逃げたいと思
うと、すぐ逃げられるんだっていう場
所を、一方では選んでいることが何と
なくわかります。つまり、これは本当は
意識して選んだんじゃないんですが、

後から考えて整理してみると濃厚な霧
開気があって、たとえば一度でも商店
でなんか買っちゃうと、もうそこを通
ると必ず朝挨拶してくるから、こっち
も挨拶するみたいで、そういうすぐに
親しくなっちゃうみたいなそういう場
所を選んでいながら、その霧開気から
逃げたいときは、すぐに逃げられる条
件に叶う場所に住んできたように思
います。濃厚な共同体意識の場所とは
もいんです。不幸な感情の時にはと
ても救いになるわけです。ホッと
孤独感を癒されるわけです。ところが

人間は贅沢だから、あまりに濃密に親
しみを覚えると、いつも見られてるよ
うな感じになる時があり、煩はしく
しょうがないみたいなことになってき
ます。そういうときは、フワッと飛び
出してしまいたいみたいなことがある
わけです。そうすると、ちょっと行く
とすぐ、孤独になれる町筋がすぐに境
を接してあればそういう場所がいちば
んいいので、ほくはひとりでそれを
選んでることに、或るとき気が付きま
した。そうすると、なぜあんまり濃厚
な霧開気がこんな時にはいやだ、煩は
しいといった自分の思い込み方を決
めているのは、多分東京の両親の元を離
れて山形県の学校へ行ったとか、動員
先で富山県へ行ったとか、農村動員で

埼玉県へ行ったとかいう、外へ出た体
験だと考えます。息苦しい時には飛び
出してしまえ、そういう自分の感じ方
をその時期が決められているように思
えます。そうすると自分は、何となく
その二つの時期の体験がうまく、都合
よく交代できるような場所を選んで
たことになりす。それは偶然に選ん
で、なんとなくこういう所がいいみた
いになったんですが、あとから考える
と、そういうふうになっているように思
います。

単純に考えますと、自分が一番長く
住んだ場所はいきおい自分が一番好
な場所に違いないことになりす。だ
からおまえは東京でどういうところが
好きかっていわれれば、ほくは大雑把
にいつて下町が好きだということにな
り、もっと細かくすれば、佃島とか月
島とかって霧開気が好きだ、あるいは
日暮界隈の霧開気が好きだ、好きだ
から今までの生涯でそこに一番長く住
んでいることになるわけです。そうす
ると東京で、自分が好みとする街筋を
探していくと、そこらへんになります。
なぜ好きなのかを強いて理屈づけま
すと、乳幼児期と青春期の二つの時期に
体験したことを、ほんの少し動いた
だけで同時に体験できるからす。

そこからほくが布疋して、現在の東
京をどう見るといふところひきの
ぼしてみます。東京という都市は、ご
承知のとおりほくが子供の時と比べ
ものにならないくらい大都市になっ
てます。ところでこの大都市になっ
てくる東京はどう見ていったらよく見える
かということがあり、すべての都市や
町は日本ではどういう場所に来てゆ
くかを考えてみます。いくつか低い台
地があって、ひとつの台地とつぎの台
地のはざまには、谷（ヤツ）がありま
す。台地の麓の方から町がでかか
り

台地の裾の方に拡がってゆきます。も
っと発展しますとだんだん埋め立てら
れた海や川口に土砂が積み重なって出
来た沖積地に街筋は及んでゆきます。
この会場の場所がそうです。そうやっ
て海に近いところに平らな町があるわ
けです。この会場の先は佃島、その先
は新佃島とか月島とかあるいは晴海と
かになります。元価を除いては全部
埋め立てられた土地です。この埋立地
が今後も今の平地の外にでき、どんど
ん海を浸蝕する形で街が展開してい
くと思ひます。

から逃がられて何となく都会らしいビ
ル街にすぐ出られる、そんな境界に近
いところを選んで、住んで来たとし
上げました。そういう場所は、東京で
は河川沖積地または埋立地にできた下
町地区とそれから大きく分けますと、
台地の麓にできた山の手地区と両方に
残っております。それが濃厚にひとつ
の霧開気を残している場所です。山の
手地域は武蔵野平野の台地のすぐ下
のところとか、台地と台地のあいだの
ところに町がまず出来たところす。そ
こらへんの街筋は、古い街筋で濃厚な

一種の霧開気をもっています。そこか
らちょっと出ると、ビル街があるって
いうことになりす。下町みたいに沖
積の平地ないしは埋立地のところに町
ができたところも濃厚な霧開気をも
っているわけです。そして町からちょ
っと出ると、ビル街になることもおなじ
です。こういう東京の見方は、日本列
島のほとんど全部の町や都市に一般化
することが出来ます。山の手の台地と
海岸に近い沖積平地ないしは埋立地に
つくられた住宅街は、両方ともそれぞ
れ濃厚な霧開気をもつ街筋をつくりま
す。そしてその境界線の向こうにちょ
っと出るとビル街とか商店とかの中心
街になっているということができそ
うす。

今、この系列に番号をつけて、分り易くしてみましょう。山の手の濃厚な雰囲気をもった町、それから下町の埋立地ないしは沖積平地につくられた濃厚な雰囲気をもった町の系列に番号(一)を付けるとします。東京のような大都会でも必ず(一)の系列の街筋が今でも残っていることがわかります。これから

だんだん、それも亡ろびていくわけですが、しかし、また一番最後まで残るのはそういう街筋なんです。これは一般化していつてみれば、地方のどこの都市にいつても、(一)の場所が残っていることがわかります。都市を見る場合、(一)という系列の街筋をまず見て欲しいということがあります。東京でいえば大きく分けて下町の雰囲気をもった(一)という系列の街筋と、山の手の雰囲気をもった(二)という系列の街筋とが、台地と沖積平地や埋立地の両極にあることがわかります。

そのすぐ隣りにはビル街のようなきやかな街筋があります。もつと細かく言ってみれば、商店の事務所とか商家をビルに改造したとか、少しおおきくして中層のビルが並んでいるようなところでは、高層のビルはまずその地域にはありません。そういう場所を(二)の系列としましょう。

これは東京の街筋でも、地方の都市

の街筋でもたぶんそんな町が必ずあると思います。皆さん一人ひとりさまざまで好みが変わりましょう。ぼくは先程申し上げた通り、(一)の系列の街筋と(二)の系列の街筋がちょうど境目になっていて、しかも(一)の系列に層するみたいなどころを好んで選んできたように思っています。

ぼくは以前に「鷗外・漱石のみた東京」という話をしたことがあります。鷗外・漱石がみた東京と、ぼくらが今見ている東京とどこが違うのでしょうか。今申し上げました(一)の系列の由緒ある山の手と下町の住宅街と、それに接した(二)の系列の低層、中層のビル街がある場所は鷗外・漱石の時代の東京にももちろんあったわけでは、ですからその二つの場所は、密集しているかと、ぼつ、ぼつとしかなかったかは別として、鷗外・漱石の時代つまり明治・大

正の東京でもありました。それから現在の地方のどんな小さな都市へ行ってもこの二つの系列の場所ならば必ずあるといえます。

そうすると、どこが東京あるいはそれに類した現在の大会にはあって、鷗外・漱石の時代にはない場所なのでしょうか。それは二つ考えられます。その場所は自分が住家として行

でもないし、ちょっと簡単に行けば行

ける場所というのでもありません。今まで申し上げた(一)、(二)の系列の手の届かない場所なんです。ある時ぼつんと行くことがあるとか、ある時休日や祭日を利用してひょんな拍子に行くことがある場所だと思えます。これから申し上げる二つの場所は東京という大会あるいは大阪でも名古屋でもいいでしょうが、そういう大会、世界の大会を決定している場所です。これを申し上げますと、ぼくが東京をどうみているかという見方が、完結されるわけでは、ニューヨークを見る場合でも、パリを見る場合でも、ロンドンを見る場合でもおなじことだとぼくは考えます。おまえはそこが好きかと言われるとそう好きだとあまり言えません。でも大変関心をもっている場所ですと言えらると思います。

その一つはこういう場所です。こういう場所ないしはそういう地域あるいはもつといえますとそういう場所の点です。皆さんもときどき出遇ったことがあると存じますが、たとえば、池袋とか渋谷とか或いは新宿とか有楽町とかの新興のビル街に行きますとよく見つけられると思いますが、ブルがビルの三階くらいのところであって、フロア全部がプールになっていたり、ビル自体が食堂街みたいになっていて、

ビルの何階かに行くところには日本料理屋さんで、ちゃんと日本式の庭園やお茶屋などがあつたり、そんな場所を見つけれられると思えます。地方の大都市へ行つても、そういう場面に出現します。たとえば名古屋のそばに犬山市という町があります(犬山城という城がある場所です)が、屋上に教会があつて、そこで結婚式なんかやるというビルがあつたりします。そんな場所を東京でもよく見つけられると思えます。

どういふことかと言いますと、本来地面にあるべきじゃないかというものが、ビルの何階かに上げられて、内包されている場所です。たとえば、プールなんてのは地面か海岸べりにあるべきものです。教会でも地面にあるべきですし、ましてビルの中に建設されるべき性質のものではありません。それがビルの中に入っちゃっているのです。お茶室なんてものは、海岸に見掛ける漁師小屋を千利休が侘寂の理念で見つけ出して、これを茶室というふうにつらえたものです。もともと茶室なんてのは地面にあるべきものなんです。大都市ではビルの中に茶室があつたりということとはよく見つけられます。つまり本来地面にあるべきものがビルの内に入っているの、そういう場所は誰でも違和感をもよおす場所です。慣れ

三百名をこえる聴衆を前に
講演に熱の入る吉本隆明氏

れば何でもありませんが、そうじゃないと何でこんなところに茶室があるんだらうというので、気分が乗らないわけです。大げさにいうと異様で気分が悪いわけです。本来地面にあるのが、自然なのにビルの中にしつらえられているから違和感をもよおすわけです。しかしこういう場所は、現在の大都会に行かれれば必ず遭遇されると存じます。

こういう場所はとても意味深い場所です。本来地面にあるべきものが、ビルの内部に包まれ、天空のところへ浮き上がって存在しているというように矛盾を内包している場所です。現在の大都市にあるこの場所はぼくには重要な場所だと思われまます。今から三十年くらい前にはあんまり東京でも無かつ

た場所だと思えます。つまり近々二、三十年のうち、あるいはもっと範囲をせばめて十四、五年のうちに出来た場所なんです。これは東京だけじゃなくて、大阪行っても名古屋行っても、あるいはニューヨークやパリやロンドンに行っても体験されると思えます。ニューヨークとかパリとか行かれたらそういう場所を探されて体験されるということとおもいます。現在の世界都市をつかみとる場合とてもおおきな意味をもった一つの系列をなすと考えます。そこは、その国の文化の現在と伝統とが矛盾して同居している空間です。その矛

盾を内包するビル空間は、日本なら日本、フランスならフランス、アメリカならアメリカの文化の質量を決める場所だと思えます。つまり本来フランスの田園、田舎というのはこうであつたはずのものが、ビルの中にあるという形を象徴します。ニューヨークならアメリカの田園がこうだったはずのものが、現在どうなっているかを、ビルの中に同存在させているわけです。つまりその場所を見ますとその国の文化のあり方、その国が田園から発達して都市ができて現在の大都市になつて来たという歴史の累積を発見できる場所です。その場所を探して行ってごらんになれば、一遍でその都市とそれを生んだその国の文化がわかってしまうといいたいところなんです。

そういう場所は矛盾だし、いやらしい場所だから行く気はしねえなと思われる方もありましよう。好き嫌いは別としていいますと、それはある意味で東京なら東京の未来を暗示している場所だと思えます。たぶん東京という都市は周辺の都市を呑み込んで裾野を広げ、中部地方まで浸蝕して、富士山麓まで到達するかもしれませぬ。どんな近隣にある田園地帯を浸蝕していくわけです。大都市周辺では田圃とか畑とかはほとんど無くなつていくでしょ

う。その場合、田圃とか畑とかの運命を暗示しているのが、この系列の場所だとぼくには思われます。ぼくにはこの大都市膨張の勢いが止められるとは思えないんです。自民党の政府を社会党や共産党の政府にかえたら止まるというものではなく、文明史の必然のように思っています。その場合の農村あるいは農業の運命はどうなんだということとは、たぶん今言いました系列を(一)と番号をつけますと、(二)の系列に象徴されています。田園と都市、あるいは農村と都会の関係、あるいは自然と人工、自然と都市、そういう関係を示していると思えます。自然を設けたとか、農業田畑をつくりたいというのなら、たぶん大都市の中に人工的につくる以外にない、とぼく自身は考えています。都市自体の展開の一部分として、その中に人工的な田園を内包しているというようなことが考えられるべきものです。また必ずそうならないかどうかろうと、ぼく自身は考えています。大都市は、その(一)の系列の場所を注目すべきだと存じます。ニューヨークとか、パリとか、ロンドンとかに行かれた場合には、案内人が嫌がってても何でもいいですから、そういう場所はなにか訊ねて、無い、知らないっていったら、土地の人に聞いて、そういう場

所を探して見てこられるとよいと思います。土地の心ある人は必ずそれを知っているはずで(笑)。現在の世界の大都市は何であるか一遍で分かると思っています。先程申し上げた(一)の系列、(二)の系列は、誰でも行くし、誰でも分かることを前提としています。そうじゃなくて、その上に何が大都市の問題なのか、何が農村の問題なのかは、(三)の系列ではじめて理解されます。

最後にもう一つの系列があります。それは、すこぶる単純なことで、東京でいえば都心地、ことに新たに展開しつつある地で見られます。東京にはいくつかの都心地のブロックがあります。池袋とか、新宿とか、渋谷とか、銀座有楽町とかです。そのなかでここ十四、五年の間にやたらに発展したブロックを見てみます。昔の東京は良かったという人に言わせると、あんなにいやらしい場所、いやらしい街筋はないと言われそうな、変貌著しい新興の町に見られる系列です。そういう新興の街にはよく見つかりますが、過密の新築ビルみたいなものが密集している場所に、この系列があります。たとえば偶然に高層ビルにあるレストランなどに入りますと、たまたま窓から次の隣のビルがすぐ傍にあって、隣のビルの窓

の中で、人が動いて事務をやっているとか、アスレチッククラブみたいなフロアがあって、体操やっていると、室内が見えちゃうようなことがあります。そういう場所は過剰にビルが密集した場所です。そこはビル空間が多重に折り重なった場所です。本来、ビルの空間が占めて限定すべき空間が、あまり過密であるために、空間と空間が折れ重なっちゃってる場所です。そういう場所をみると、また隣のビルの窓の向こうから、また国電の線路が見えて、電車が走っている。もつと極端なことを言いますと、そういう風に向こうのビルの窓の向こう側に国電の線路が見えて、そこを電車が走っているのがたまに見えるし、そしてよく見ると電車のなかで人が立って乗っているのがまた見えたといったことに出会います。本来ならば、こんなはずはない、こんな風に一つの視界に見えるはずはないような多重的な光景が折り重なって見えちゃうようなところですよ。

昔からあったビルで、本来それ以上にビルを建てることは出来ないんだけれども、何か建築法でまだあと何階位上までならば大丈夫なんだっていうようなことで、上に何階か継ぎ足したようなビルもあります。そういう一種の過密性を持ったビル街は本来人間の

視野でもって一望出来る場所からは、絶対同時には見えない、大変珍しい偶然だというような風景が見えてしまうのです。つまり、二つないし三つの空間が重なって見なければ、とてもこんな光景は同時には見えないはずだよっていうようなものが、ひとつの視野に折り重なって見えてしまうような場所です。それはとても重要な大会のなかのひとつの系列を成します。

東京にも、ニューヨークにも、ロンドンにも、パリにも、そういう場所は必ず存在いたします。東京っていうのはビルだけで話っちゃうんじゃないかといった感覚的に危機感を感じさせる場所です。この系列を(四)としますと、この(四)は現在の大都市が裾野をどんどん浸蝕していくと同時に、内側に浸蝕して内圧を高め、濃度を濃くしていく作用をもっていることを象徴している場所です。この系列(四)は、ほくには、注目して見るべき大会の場所だと思えます。東京でも、新宿にも、池袋にもこの有楽町と銀座の通りとの中間のビル街にもございます。それから現在の建築家の内で、モダンなことといいますが、前衛的なことといいますが、モダンなことが好きな建築家が設計しましたビルの中に入りますと、ビルの内部にそういう場所を発見することが

あります。また、空間が折り重なったような効果を出す場所を創りたいために、今の建築家は鏡を使っています。鏡、あるいはピンと張ったためらかなガラスの反射を使って、そういう効果を出しています。これはビルの中でも皆さんが新しいビルに入られると偶然か必然か、そういう場所を発見することがあります。一つの視野ではとうてい見れないような、様々な空間がそこに密集しちゃうってよというような効果が、ビルの中でも見つけることができます。もちろん、ビルから外を眺めた場合でも見つけることができます。それは大会の高層ビルの密集地には必ず存在していると考えます。その場所から見られる折り重なった空間がどんな風な重なり方をしているのか、そのときどんな風に感じられるのか、ここで見えるものは、その大都市の展開度と、その都市の持つ一種の文化の危機感を象徴的に表わしていると思えます。現在少くとも世界都市だと言われているような大都市には、必ずその二つの系列が存在いたします。

今まで申し上げてきました(一)、(二)の系列と(三)、(四)の系列とは、前者が自分が住居として住んだ体験を拡大してここで得られる都市の見方だと申せまし

よう。それから先程申しあげました、青春前期から青春期にかけて、自分の町や都市の外側から、自分の街の内部を考えてみたという体験は、(三)、(四)の系列の場所をみる場合に加味されていると思います。都市を外側からみる見方は、(三)や、(四)の系列の見方に関すると思えるのです。

これは、ニューヨークのマンハッタン地区、上から見た写真です。この写真に近い場所を東京で探せば一番この会場を含む場所に近いと思えますが、比較してみましよう。これが、勝どき橋です。ここから銀座・有楽町に至る道路の界限が、マンハッタン地区に対応する場所です。両者は変わりばえないわけですが、何が変わっているかというと、ビルの高層差がちがいます。それから隅田川お川岸で、勝どき橋のすぐそばの場所、この場所は住宅地と小さな商店の事務所みたいなものと兼用の建物とか、商社会社のビルとか、そういうようなものがある場所です。そういう場所に若干、川向でも、川のこちら側でも住居の街の感じがします。が、そういうところはニューヨークには、面影もありません。そこが違うように思います。

都市の展開を左右できるような主役

は、建築設計家とか、土地を持つことができたビル業者とか、あるいは不動産業者とか、デパートを作れるとか商店を作れる資金がある資本家とか、そういう人達のように思われます。ほくらも皆さんもそれに関与できないし、関与してないわけです。それにもかかわらずいまニューヨークのマンハッタン地区と東京のこの会場を含む築地、有楽町地区とを比較しますと、ほくらも皆さんでも考えられる展開の仕方があります。東京の築地、銀座の中層ビルや低いビルはやがてマンハッタン地区のビルみたいに高層ビルの乱立した状態に変わっていくだろうということとです。ほくらもそう考えますし、多分皆さんも、ごく自然にそういう風にな

っていくだろうと考えると思えます。自分が関与しているわけではないのですが、予測をたぶん正確に加えることは、皆さんもほくらもできるわけです。それは多分、九十%までは当たるだろうと思つてます。それはなぜでしょうか。ビル業者でもないし、大金持でもないし、設計家でもないのですが、都市はこうなるにちがいないということについて、わたしたちに予測できて、しかもそこだけは必ず当たるはずだと九十%くらいの確率で言えるのはなぜでしょうか。もし問題があるとすれば

そこが大切なような気がします。つまり自分は関与してないし、関与する力もないんだけど、しかしこうなるに違いないという予測は、誰でもがやろうとすればできるということとです。これは言うてみれば、都市が実際に展開していくには、ひとつの方向性がありそれに對して自分達は、こういうイメージで持つて東京を思い浮かべているとか、あるいはイメージの中に願望も含めまして、東京はこういう風な都市になってくれたら、と考えることは、願望が叶えられる方向に、有効性をもっていることを意味していると思えます。そのことはとても大切だと思えます。

「ほくらが見た東京」と皆さんがそれぞれに見た東京は全然違うわけでしょうし、好みも違うわけです。また願望も違うでしょう。それは皆さんが、自由に一人ひとり思い浮かべることができるわけですし、それはとてもいいことだと考えるのです。つまり、間接的でありませんが、ほくらや皆さんの願望とかイメージを抜きにした都市は造れない部分が必要あり、またいくら優れた設計家がいっても、皆さんが持っている願望とか離れた都市は設計できないことが判ります。今まで申上げてきました四つの系列をよく見てゆきます

と、どうなつてゆくか、また自分ならこういうイメージで東京を描くという願望を確かめることができるかと存じます。その願望は百人百様で、折り重なつてイメージとして東京の街に氾濫してしまつた場面を予想しますと、ある程度はそういうイメージをくみとることなしに東京が展開することはあり得ないと言えそうな気がします。現在の世界都市ともいえる大都市は具体的な、現実的な都市機能よりも、イメージとしての機能の方がたぶんおおきくなつていくにちがいないと思えます。

今日は、回顧的のみにならず、そうかといつて回顧も含まれている形で、東京をどう見るか、おっしゃるきたらと考えることができました。おおよその骨組みは言い尽せた気がいたします。皆さんの御参考にお供せられたらと念じながら終わらせていただきます。

(昭和六二年一月一七日講演記録)

「中央区年表―昭和時代Ⅶ(成長と飛躍篇)―昭和三〇年から三四年の記事を宮川英夫氏の編集により刊行。

「中央区年表―江戸時代篇下巻」文政元年から慶応四年を安藤菊二氏の編集により刊行。江戸時代篇は上・中・下巻と揃い、有償頒布しております。各巻とも千六百円です。